

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ一人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

悪人^{あくにん}こそ、救^{すく}われる!?

20代のおわりころ、「あなた、ちょっと京都に行って話しをしてきなさい」と森崎和江(作家)さんに言われて、何も分らないまま行ったお寺が、何と京都の東本願寺だった。お寺との生まれて初めての出会いである。浄土真宗大谷派の総本山で、そのあまりの広さ、大きさに呆然としたことを覚えていた。講演では同和問題や女性問題などを夢中でしゃべった。思えば、恥ずかしい限りである。それ以来、4、50年余にわたり、浄土真宗のさまざまな人と縁がある。

何度目かの東本願寺での研修会の時のことである。何年たっても、いまだに経文は一行も覚えていないふらちな「無縁の衆生」のままの私は、本山の朝のお勤めの時、いつも全身の力を抜いて目を閉じ、シーンと音のようにお経を聞いている。流れるように進んでいく経文のなか、「世のもうみょうを照らすなり」という言葉がストン!と私に落ちてきた。なぜか、「もうみょう(盲冥)」という言葉が私に引っかかってきたのだ。「あっ、盲冥って、私のことや!」と一瞬で思った。盲冥の私を照らしているものがある、そうか、生きくればかりの、おろかな私が照らされている、問われている、ということか!と芯から納得した。これは、鎌倉時代の親鸞さんの言葉である。

いわゆる経文は分からないが、女性史や部落史などの日本社会の被差別民・マイノリティの歴史をさかのぼっていく作業は数十年、手さぐりでやりつけてきた。へもともとけがれた人など絶対にはない、日本社会の「けがれ思想」がけがれたとされる人をつくりだした」ということは自明なことである。そのけがれ思想が深くまん延していた鎌倉時代に、それを根底からひっくり返すような思想を説いたのが親鸞であると思う。

当時の被差別民の呼び名は河原もの、屠沽(とこ)の下類、乞食(こじき)などさまざまにあり、漫才は「乞食法師」、能は「乞食(の)所行」と呼ばれていた。生きていくために日々、鵜(う)を使って魚を取るといふ殺生をくりかえしてきた「鵜飼(うかい)」の名人が当時の人々につかまり、殺されて地獄に墮ちるといふ演目の「鵜飼」が、当時(今も)能の最大の名曲だった。このように生活のために日々、生きものを殺生せざるを得ない人々は当時「悪人」と呼ばれていた。善人こそ救われるという当時の社会のなかで、親鸞は「悪人こそ救われる」という「悪人正機」という考え方を説いた。けがれ思想がまん延していた時代に一番とん底で生きていた悪人といわれている人々こそ、救われるのだという解放の思想である。また、それは当時の社会の価値観を根底からくつがえす人間解放の考え方だった。

問 教育政策課

同宗連の結成

昭和54(1979)年、世界宗教者平和会議で、日本代表として参加していた僧侶から「日本には部落差別はない」という発言がありました。昭和44(1969)年には、同和対策特別措置法が制定され、同和問題の解決のため、環境改善や教育の充実などの事業が進行している最中の発言であり、大きな問題となりました。この発言が契機となって学習会が重ねられ、昭和56(1981)年「同和問題」とりくむ宗教教団連帯会議(同宗連)が結成されました。

以来、多くの宗教者が自らの認識を高めながら同和問題をはじめ、さまざまな人権問題の解決のための役割を担っています。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。